

おひとりさま事例集（6） ～救急搬送の実際①～

今回の主人公は、井村栄治さん（87）です。子供はなく、奥様と長年にわたり仲良く連れ添ってきましたが、2年ほど前に先立たれてしまいました。

栄治さんは、奥様と2人で暮らしていた自立型の高齢者向けマンションで、引き続き生活していました。建物内にフロント、レストラン、クリニック、居宅介護事業所があり、ケアスタッフ、看護師、ケアマネージャーなどが常駐してはいますが、原則として居住者本人の自立を前提としているので、必要なときに手助けをしてくれるといった程度です。



栄治さんは、奥様が亡くなってから2年の間に、年齢相当の物忘れや理解力の低下とともに、元来の頑固さと思い込みの強さに拍車がかかり、この高齢者向けマンションのスタッフが、ご自分が外出している間や寝ている間に居室に入り込んで、奥様との思い出のアルバムなど大切な荷物を次々と盗んでいくという妄想を主張するようになりました。

その結果、居室から外出することを一切やめ、建物内のレストランにも行かずに食事は宅配弁当で済ませ、ベッドで休むこともなく一日中ソファで座り、眠くなったらソファで横になるという生活をするようになりました。月に2回ほど訪問して、お悩みや心配事を傾聴しても、この生活スタイルだけは絶対に譲れないということでした。介護付き有料老人ホームへの転居も提案しましたが、奥様との思い出のこの高齢者マンションで最期を迎えたいと強くご希望されていました。

すると、見る見るうちに足腰が弱ってしまいました。相変わらず栄治さんは「大丈夫、介護人の世話にはならない」と拒否する姿勢でしたが、居室内のトイレに行くにも苦労するようになっており、何とか説得して、ようやく介護保険を申請することができました。

栄治さんに「要介護2」の認定が出た直後。懸念していたことが起こりました。居室で転倒し、腰椎を骨折してしまったのです。朝6時半のことでした。

救急車が駆け付け、高齢者マンション内の看護師と救急隊員が、栄治さんを搬送しようとしたのですが、そこで栄治さんの抵抗が始まりました。

居室のキッチン横のフローリングに倒れたまま動けなくなっていた栄治さん。救急隊が病院に行こうと説得しても、「ここを離れるわけにはいかない」と拒否。身体に触れると、骨折による激しい痛みもあり、叫びながら傍にあった尿瓶で救急隊員に殴りかかってしまったそうです。本人による強い拒否があると、救急隊も無理やり運ぶことはできません。救急隊は帰ってしまったそうです。

そこにいた看護師も、まずは失禁していた処置をしようとしたところ、同様に殴り掛かれそうになったので、お手上げ状態。

ここでOAG ライフサポートに連絡が入りました。その後、どうなったでしょうか。次回、続きをお伝えします。

つづく